湖北の伝承歌

フォークソング FOLK SONGS

年長者から伝承されてきた生粋の土着の唄が、湖北にもたくさん残っています。
口伝のためなのでしょうか、湖北のまちのなかでも、それぞれ特色がみられます。同じような歌詞でも織り込まれる地名が異なったり、お祝い唄としてポピュラーな「伊勢音頭」も、メロディーや歌詞に微妙な違いがみられたり……。
しかし、どの唄にも深い味わいがあります。その地で暮らしてきた歌い手が、思い思いのストーリーを描きながら歌うことができる、そんな唄だからかもしれません。

復活させたい嫁入り唄

嫁入り唄（高月町雨森）

目出度（めでた）　目出度が　たび重なりて
鶴が御門（ごもん）に巣をかける
鶴が御門に　何というてかける
御家御繁盛（おいえにはんじょう）というてかける

さした盃　中見ておくれ
中は鶴亀　ごようの松
唄いなされよ　どなたもだれも
唄うて男前が下がりゃせぬ

唄うて男前が下がるかと思うや
唄いかねます今までは
こんな目出度い　お酒をよばれ
唄うて男前が下がりゃせぬ

嬉し恥ずかし　初めの夜さは
まくりかねます　夜着のすそ
夜着のすそなら　まくりはすれど
まくりかねます　ヘソの下

まだ二番ほど、あやしい歌詞が続くのだが、だんだん過激になっていくので省略。湖北の嫁入り唄は、三、四番までは、どの地区でも似たような歌詞だ。あとは場所に応じて、好きなようにアレンジして唄うという感じだろう。

高月町雨森（あめのもり）では、嫁入り唄を復活しようと、四十、五十代の人が集まって、この唄の練習をしている。講師は、唄や太鼓が大好きという地元の南部次郎さん。雨森では嫁入り唄の歌詞を書いた扇子までつくってしまった。

結婚式の当日、お婿さんの家では、お嫁さんが来るまで、親戚や村の友達などが集まって本膳という会食が行われる。お嫁さんが着いたという一報が入ると、みんなが村のはずれまで出迎える。ハイヤーから下りたお嫁さんは、嫁入り唄の先導で、家まで嫁入り道中があるわけだ。嫁入り道具が来たときも、この唄が出る。唐草模様の風呂敷で包んだ長持などを、歌いながら担いでいく。ベロンベロンに酔った人が多いので、青竹を杖にして担いでいくのだ。

南部　次郎さん

こんな結婚式の風景も、最近は少なくなってきた。最初の減少期は、昭和三十年代後半から四十年代にかけて。生活改善運動とかいう村の取り決めで、冠婚葬祭が簡素化されていく時期だ。二番目の減少期は、昭和五十年代から。逆に結婚式が派手になっていって、ホテルや結婚式場ですべてまかなってしまうようになったから。価値観の多様化とか言いながら、どの披露宴もよく似たパターン。嫁入り唄が出るようなやり方があってもいいと思うんだけど。

大勢で歌うと喜ばれる祝い唄

長持ち唄（浅井町相撲庭）

目出度ナー　目出度ーが
世に重なりてー
鶴がナー　ご門に
アー巣をかけるナヨー

鶴がナー　ご門に
アー何というてかけるー
お家ナー　ご繁盛と
アーいうてかけるナヨー

お嫁さんが在所に着いたときや荷物を受けるときだけでなく、在所からお嫁に出るとき（立ち行（たちゆき））や荷物を出すときも歌う。「このごろの若い人は唄を知らんし、よう歌わんので、ちょっと歌うてくれと頼まれるんですわ。たいてい、この二番を繰り返して歌いますけど、替え歌もありますよ」と、宮川肇さん（67歳）。

歌詞は、湖北のどこでも同じような内容だ。花嫁さんの頬が染まってしまうような歌詞もあるが、おめでたいお酒を飲まないと、大きな声では歌えないようだ。

「できるだけゆっくり歩いて、たくさんの人が声をそろえると、当家の人たちは喜ばれますね。若い子らに教えてやらんとあかんなぁ……」

宮川　肇さん

母から口伝えで覚えた唄

びわ町中浜に生まれ育った西川ひさゑさん（73歳）が、親から教わったり、職場の友人たちの間で流行ったという唄を、たくさん歌ってくださった。「本に載せるのはチョット……」という歌は、やっぱり載せられません。

伊勢音頭

ホラ　ヤットコセー
ヨーイヤナー　アレワイサ
コレワイサーソリャ
ヨーイトコセー
鶴がナーエ　ご門に
ソレ　巣をかける

ソラヤットコセー　ヨーイヤナー
アレワイサー　コレワイサー

在所についたお嫁さんを迎えるときの唄。囃子の部分がにぎやかで、荷物が軽くなるような軽快なリズムだ。

お手玉唄

錫（しゃく）に　おいずる　杖に笠
巡礼姿は父母を　訪ねよかいな
ふだらく　紀州は　にくまんの
那智山（なちさん）　お弓は　お手たたこ
響こうかいな

みるみるお弓は　立ち上がり
盆の祝儀の志　心情（しんじょう）かいな

ようこそ訪ねて　ござんした
さだめし　お連れは　親心
かわいいわいな

いやいや　わたしは一人旅
ととさん　かかさん顔知らず
会いたいわいな

無理やり　押しやり押し戻し
……（不明）

泣く子を抱いたり
すかしたり

西川ひさゑさん

なだめて　いなすは親心
かわいいわいな

山坂　下り坂（おさか）　観音堂
観音越えて来たわいな
来たわいな

九つ巡礼の　手を引いて
……（不明）

十まで育てた　このお鶴
わが子を殺して骨を取る
金をとる

浄瑠璃の『傾城（けいせい）阿波の鳴門』がもとになったもので、学校でも流行っていたという。「子どものころ聞いたままに歌っていたんで、はっきり意味がわからないところがあるんですよ。もうちょっと思い出せないところもあるし……」と、西川さん。

（歌詞の漢字は、参考文献などをもとに編集室で当てたもの）

どっこいしょ節

行こか　片町　戻ろか　我が家
ドッコイショー
思案最中のコリャ　大手橋ヨ
チョイナ　チョイナ

大手橋は、長浜の飲み屋街・片町へ通じる所にある橋。もう一本南の「さくら橋」は、思案橋とも呼ばれていた。

嫁にやるなら豊かな村へ

戦国時代から鍛冶師の里として繁栄してきた浅井町鍛冶屋（かじや）出身の青山郁代さん（59歳）に、集落名が歌われた唄を教えてもらった。タイトル不詳。

鍛冶屋かんかん　かか昼寝
おやじのなんやら　真っ黒け
嫁にやるなら　鍛冶屋におやり
鍛冶屋かんかん　かか昼寝
おやじの吸い玉　真っ黒け
ああ　真っ黒け

「鍛冶屋三株」といわれる、かつて奈良から移住してきた鍛冶職人三家の一軒に育った青山さん。「他所の子が鍛冶屋の子を、村の中でも鍛冶職人の子をはやしたてて歌ってました」という。軽いリズムのなかに、揶揄と羨望が入り交じっている。

父さま　ここは京さまか
何の　そじゃろに
鍛冶屋のまちよれ
お前に見せたや　国友を

甲津原から七曲峠を越えて鍛冶屋に向かう父娘連れ。娘が父に「ここは京

あやしい取材班▼

『憧れのハワイ航路』は長浜で生まれた

西美濃へ行く

江口夜詩がつくり岡晴夫が歌う

晴ぁ～れた空　そ～よぐ風
港ぉ～出船の　ドラの音たのし～
（作詞／石本美曲起）

ご存じ『憧れのハワイ航路』の一節である。ご存じとはいっても昭和二十三年につくられた歌だから、ウンウンとうなずくのは五十代以降の人がほとんど。カラオケのナツメロには定番として必ず入っているので、若い人も一度は耳にしたことがあるかもしれない。岡晴夫が、晴れやかな歌声で「晴ぁ～れた空」とやったから、スコーンと晴れわたったイメージに満ちている。

歌ったのは岡晴夫。これは、たいがいの人が知っている。しかし、この歌が長浜でつくられたことを知っている人はほとんどいない。

「エッ、ホンマかいな」と思われるだろうが、ホンマの話なのである。

曲をつくったのは江口夜詩という。古賀政男、古関裕而、服部良一とともに戦後の歌謡界をリードした作曲家のひとりである。江口夜詩という名前が彼らほど知られていないのは、テレビが普及し出した晩年は、病に倒れて作曲活動ができなかったからだ。

「なんで長浜でつくられたん？」

「江口さんは長浜の人やったん？」

「どこに住んでやぁったん？」

といった矢継ぎ早の疑問が、読者の頭に一挙に噴き出してきているに違いない。

まあ待ちなさい、あせらずに並んで並んで。そこの奥さん、割り込みはだめ。さあさあ、ここから先は読み逃せない。長浜みーなのあやしい取材班が、じっくりと読者の疑問にお答えしまっせー。

長浜にあった奥さんの実家に疎開

さて、江口夜詩と長浜の関係である。実は、夜詩の奥さんが長浜の人だったのである。『憧れのハワイ航路』がつくられた昭和二十三年ごろといえば、戦後の混乱で食うものにも困ったという時代だ。一面の焼け野原だった東京の街に、並木路子が歌った『リンゴの歌』が流れたのは昭和二十一年。それから二年後のことだ。こう言えば、若い読者にも時代背景がわかってもらえるだろう。

江口夜詩は、戦争が激しくなったころから、戦後しばらくまで奥さんの実家がある長浜のまちに疎開していたのである。場所は現在の長浜市朝日町、旧町名でいうと上田町。子ども歌舞伎のモニュメントがある田町会館の近くである。

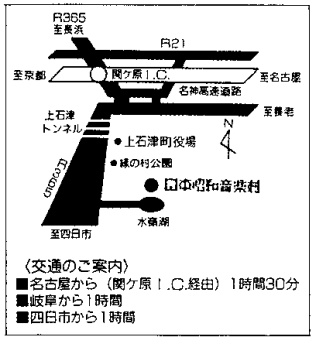
あやしい取材班が、江口夜詩を知ったのは『滋賀の文人』という本。夜詩のことが書かれた二ページほどの解説のなかに、長浜に住んでいたころに『憧れのハワイ航路』をつくったという一行が目に止まった。

「江口夜詩さん？　さあ知りませんな」

「憧れのハワイ航路は知ってますけどね」

「もう五十年も前の話やからね」

長浜に住む七十歳以上の人たちに何人か伺ったが、そんな調子でさっぱりわからない。そこで、夜詩が岐阜県の上石津町出身で、上石津町に江口夜詩記念館があることを知ったあやしい取材班は、さっそく上石津町に取材に出かけてみることにした。



岐阜県上石津町に江口夜詩記念館

国道三六五号線を東に向かう。関ケ原町を越えると、道は南に折れる。長いトンネルを抜けると町の中心部だ。役場や緑の村公園などを通りすぎると、日本昭和音楽村という看板が見えてくる。長浜から車で一時間もかからない。上石津町は意外に近いのである。

江口夜詩記念館は、水嶺湖という美しいダム湖の畔に三年前にオープンした。上石津町が、ふるさと創生の一環として、日本昭和音楽村というキャッチフレーズでこの一帯を整備したのだ。江口夜詩記念館のほかに、六十年代から七十年代のフォーク（Folk）やニューミュージック（New music）をテーマにしたFN音楽館、コテージ、レストランなどもある。

記念館のメインは二百五十席の音楽専用ホールで、そのロビーに江口夜詩が愛用したピアノや当時のレコード盤、自筆の楽譜などが展示されている。彼が作曲した流行歌は四千五百七十曲あまり、校歌や町歌などは四百曲にものぼるという。そのタイトルが並んだ展示のなかに『長浜市民の歌』『長浜町歌』『長浜音頭』『伊吹シャンソン』などの歌を見つけた。江口夜詩の年譜には「昭和十四年、長浜の高田志ずと結婚」とある。

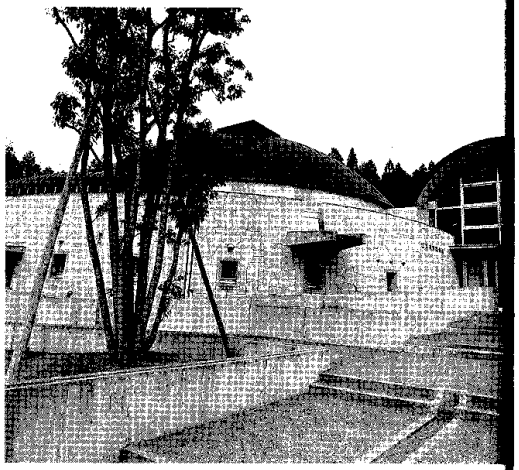
日本昭和音楽村の若い所長さん、中川真澄さんに江口夜詩と長浜の関わりを聞いてみた。

「奥さんの志ずさんは、東京でご健在ですよ。浩司さんという息子さんも作曲家です」

「長浜生まれの志ずさんが、生きておられるんですか。志ずさんと夜詩の出会いは？」

「さあ、そこまではわかりません。志ずさんと浩司さんに直接聞いてみたら？」

というわけで、あやしい取材班は、志ずさんと浩司さんを求めて東京へ旅立った……といいたいところだが、貧乏編集室だから出張旅費も出ない。電話取材でがまんすることになった。



江口夜詩記念館（日本昭和音楽村内）
開館時間：9時～17時
休館日：毎週水曜日と休日の翌日
電　話：0584-45-3344
住　所：〒503-16
岐阜県養老郡上石津町下山2011

▶ホルンをイメージしてデザインされた記念館の江口夜詩資料展示コーナー。

▲直筆の楽譜やレコード盤などが展示されている。